

不動心その2

2021.1.15

今年度は、多くのスポーツの大会や文化系のコンクール等が中止となった。中学3年生や高校3年生にとっては、一生に一度しかない機会がなくなってしまったことになる。生徒も保護者も、そして指導者も様々な思いを胸に、この逆境を乗り越えてきたはずである。

身近なところで聖光学院高校野球部の斎藤智也監督は、今年度の状況をどのように思っていたのだろうか。

どう考えても野球をやりたくてここにいる選手たちにとって、人生最大の衝撃だったろうと思います。私自身にとっても、人生最大の衝撃でした。コロナ自粛中ではありましたが、夏の大会に向かっていてのトップメンバー35名を緊急招集し、ミーティングを実施しました。

選手たちの気持ちを考えたら、緊急事態と感じましたから……。そこで選手たちに「やめたいやつはいるか……」と問いかけ、目をつぶらせて手を挙げさせました。やり方を変えて二回選手たちの意志を確認しましたが、誰一人として野球をやめたいという選手はいませんでした。沈黙が続く中、「やると決まった以上は、何に向かっていくか、話をしようか」と話を切り出しました。

「俺にとって、56年生きてきた中でワーストワンの衝撃だ。人生嫌なことはたくさんあるけれど、そのぐらいの衝撃が俺にもやってきたぞ」と、まずは自分の中の話をしました。野球をやっても目標がないということは、どう考えても選手たちにとっては最大級のショックですから。

それでも、聖光学院が普段から目標にしていることは何かを整理してみようと、話を先に進めました。「鍛錬を積んで仕上がることが、最終的に野球につながる。逆境や不都合に襲われたときは、どういう風に解釈をすべきなのか」という言葉を常に投げかけてきました。逆境や試練は、自分に対しての、自分を鍛えるための問いかけであり、自分に対してのメッセージであるから、試練や逆境には意味があるのだと……。

ただ、この甲子園中止に意味があると思わせるには、どうしても無理がありました。でも、全ての競技も中止だし、オリンピックも見送り。全てが足止めを食らっている状況の中で、理不尽ではあるけれど、平等に苦しんでいるということ話をしました。

「そんなふうにみんなが苦しんでいる中で、自分たちが一番明るく、光を醸し出すぐらいのチームとして、夏まで突き進むためにはどうしたら良いのか」という話し合いを進める中で、「不平不満を言わずに全てを受け止める力」その力こそ、聖光学院が日本一を目指している所だと話をしました。「不動心」とはそういうことです。

聖光学院高校野球部は、この状況から県大会では優勝し、夏の県大会14連覇を達成する。加えて東北大会でも、あの強豪仙台育英を8-0で倒し優勝を成し遂げる。並のチームではない。逆境になればなるほど、聖光学院高校野球部は強さを発揮するように思う。困難にも動じない聖光学院の強さが一層際立つことになる。

なぜそれができるのか。指導者の生き方、考え方、指導哲学、指導方針などの問題であろう。斎藤智也監督は、母校の福島市立大鳥中学校での講演の中で、「コロナで奪われたものは戻ってこない。コロナに対する考え方を改め、何事にも前向きに取り組んでほしい」と語っている。また、「不動心」をモットーとした指導方針についても触れ「自分の成長なしに成功はない。人と比較せず、自分の成長を成し遂げることが大事」などと話している。

今年度は、我が家にある「不動心」の色紙が、よりいっそう輝いて見える。